

いかにして内的関係の「像 (picture, Bild)」を作るか

——後期 Wittgenstein の数学の哲学

岡本賢吾
首都大学東京

1930年代末から40年代半ばにかけて書かれた、数学の哲学についてのウィトゲンシュタインの一連の草稿（それらは基本的に『数学の基礎に関する考察 (Bemerkungen über die Grundlagen der Mathematik)』に集成されている）は、この主題に関する彼の思索の到達点を示していると言つてよいものであるが、用語法の特異さ（「像」「概念」「範型」といった独特の語彙が、エキセントリックと言わざるをえない仕方で頻用されている）、議論のスタイルの破格さ（唐突な発問、恣意的な例示、直観的な断定、というサイクルがどこまでも繰り返される）、そしてそれ以上に、提起される主張の（少なくとも一見した限りの）過激さ・奇矯さ——例えば、いわゆる根源的規約主義や、あるいはまた、あまりにも無造作な真矛盾主義が説かれているように読める（ただし、根源的規約主義だとする解釈については、それが誤りであることを本提題で説明する予定である）——のため、これまでのところ、ウィトゲンシュタイン哲学の価値を積極的に証拠立てると言うより、むしろそれへの懐疑や異論を動機づけるソースとなってきたと言わざるをえないように思われる。

こうした状況の中で、多くの人のネガティブな見方を覆しうるだけの解釈を直ちに提出することはもちろん容易でないが、しかしそこへ向かうための第一歩として、本提題では、彼の思索の中心に位置すると思われる考えを、一つ一つなるべく精確なテーゼの形で抽出し、それら相互の間の論理的な関係を明瞭化させるよう試みたい。これにより、それらのテーゼが、(i)テクニカルに見て、少なくとも数学の理論構造のまともな分析の試みとして認めうるだけの正当性を持つのみならず、そこから出発して一定範囲の数学の啓発的な再構成を行うことが期待できる基礎的なアイデアを与えていること、(ii)またとりわけ、哲学的に見たとき、現代の先端的観点に立つことで初めて適切に評価可能となるような、独自の大きな射程の洞察を含んでいること、を指摘できるだろう。

ここでは、このようなテーゼとして提題者が想定しているもののうち、ひとまず最も基本的なものを列挙してみる（当日、より詳しいリストを提示する）。

(1) 数学的命題（典型的には等式）とは、通常の経験的な諸命題（あるいはむしろ、それらの命題が描出する経験的な事態や状況といったもの）のうち我々が識別する、様々の一般的で形式的な特性や相互連関（ウィトゲンシュタイン自身の用語では「内的な性質／関係 (internal property/relation)」）を、ある特定の仕方で具現する（この具現関係についてはテーゼ(3)でさらに説明する）、何らかの構造 (Structur)・図式 (schema)・ダイアグラムといったもの（彼の用語では「像 (Bild)」、より specific には「範型 (Vorbild)」）である。

(2) 数学的命題が（内的な性質・関係の）構造・図式・ダイアグラムであるとは、(2-1)一方で、これらの命題が、個々の経験的事態や状況から切り離された本質的に一般的・

抽象的な表現（「形式的命題」）となっており、そのことによって多様な経験的事態・状況に適用可能なものとなっているということ、(2-2)しかしまた他方で、それらが、何らかの度合いと仕方で我々にとって認識的に接近可能なもの（ウィトゲンシュタイン的に言えば「直観可能 (anschaulich)」「通覧可能 (übersichtlich)」なもの、「見て取る (sehen)」ことのできるもの）であり続けていること、を意味する。

(3) 数学的命題が、何らかの内的性質・関係を（一般的・抽象的な仕方で）具現することができるのは、この具現関係をサポートする一定の技法（「計算 (Rechnen, calculation)」「テクニク」）があることによる。すなわち、典型的には、しかるべき諸定義から始まって、所定の諸々の「変換 (transformation, Umformung)」規則の適用を経て、この命題自身の導出にまで至る構成、つまり証明が——より適切に言えば、そうした証明の構成を可能にする、定義・変換規則等々の適用の様式・技法の体系としての計算、テクニクこそが——、その数学的命題をそれ自身（一定の内的性質・関係の具現物）とさせているものである。この意味で、我々は数学の命題の証明を見ることで、その命題の適用（ふつうの言い方では、その命題の「意味」）を理解する、と行うことができる。

(4) 内的な性質・関係、すなわち、経験的な諸命題（それらが描出する事態や状況）のうち我々が識別する一般的・形式的な特性や連関というのは、問題となっている経験的命題（事態、状況）がどのようなものであろうと、実は本来的に、それ自体ではまったく未規定なもの、むしろ、我々の「自発的な決断 (spontane Entscheidung)」によって（言語行為論的に言えば、我々が「宣言的 declarative」な発語内行為を遂行することによって）随意に規定しうるもの、従ってまた、無際限に多様な仕方で拡張可能なものである（「自発的な決断」というウィトゲンシュタインの言い回しは、入江俊夫氏から教示を受けた）。まさにこのために、内的な性質・関係の構造的・図式的・ダイアグラムの具現である数学的命題自身（あるいは、そうした諸命題が一定の計算法・テクニクによってサポートされて作り上げている体系としての数学理論）もまた、他にいかようにも形成される余地がありえた、本来的に随意的な約定の産物——ウィトゲンシュタイン的に言えば、我々が自ら「概念形成 (Begriffsbildung)」を行うことによって、「発見 (discover, entdecken)」するのではなく）「案出 (invent, erfinden)」した結果——に他ならない。

スペースの関係で、ここでは以上の4つのテーゼを上げるに留めるが、当日の提題では、さらに、なぜ随意的な決定に基礎を置く数学理論が、通常そう認められている通りの必然性を備えうるのか、また、随意的な決定が基礎だとすれば証明という手続きは不要となるはずであるのに、なぜ我々は証明を数学にとって不可欠の要素として遇するのか、といった諸問題に関わるテーゼを取り上げる予定である。またそれ以前に、以上の4つについても、おそらく読者にとって納得し難い側面があるだろうと予想されるので（特に、テーゼ(4)など）、当日の提題でより詳しい説明を加えることにしたい。

さらに最後に、当日の提題では、こうした数学の哲学をめぐるウィトゲンシュタインの思索が、その後、なぜ、いかにして心の哲学への大きな転回・展開を遂げたのかについて、いまだ萌芽的な提案でしかないが、一つの答え（数学の哲学の「認知哲学的転回・展開」と言えるようなもの）を示唆して閉じることにしたい。